



バンコク商工会議所が2024年3月に発表した「23年下期タイ国日系企業景気動向調査」によると、「今後の有望市場はどこか」の問いに、インドがベトナムに次いで2位となった。新型コロナウイルス収束から2年余りが経過したものの、タイでは大手自動車メーカーの閉鎖のニュースが流れた。裾野が広い分野だけに、日系企業への影響が懸念される。次の市場としてインドに目を向けるのもつなげる。

5月下旬、間もなく雨季を迎えるインドの首都デリーと日系の自動車工場が立地する近郊の都市グルガオンを訪ねた。バンコクからは4時間半ほどのフライトで行くことができ、出張も苦にならない距離である。空港は大気汚染の影響でもやがかっており、インド北部では熱波の到来により、気温は連日40度を超えたという。

有望市場、注目集めるインド



デリーにある日本貿易振興機構(ジェトロ)事務所で現地の事情を聞いた。日本をはじめ、海外のビジネスマンの来訪が途絶えることがないそう、まさに有望市場として「旬」を迎えている一端を垣間見ることができた。事務所スタッフからは「モディ首相が就任した2014年から掲げる製造業振興のスローガン『メイク・イン

・インディア』により、インドは直接投資を促進しており、GDP(国内総生産)に占める製造業の割合を15%から25%に引き上げることが目指している」「これまでにタイやインドネシアからの輸入に依存していた半導体・電気自動車などの製造部品は、コスト削減や保護主義から、国内生産へシフトされる可能性がある」という話を



インドの経済成長率を伝える地元の経済新聞

経済成長が著しいインドの首都デリー市内の様子

製造業の振興へまい進

聞くことができた。

インドでは、インフラ整備の遅れが指摘されるが、この10年間で道路の敷設距離は1・5倍、空港の数は2倍となった。水道・飲料水にアクセスできる割合も倍増しており、近年の進展は目覚ましい。加えて、魅力のある市場規模、若年層の躍動もインドが注目されるゆえんだらう。今回、インドを肌で感じてみて、製造業に限らずあらゆるビジネスに大きな可能性を秘めていると実感できた。

バンコクに戻る日の朝、ホテルで読んだ地元経済新聞の1面に、24年のインドの経済成長率は8・2%と掲載されていた。その数字に驚き、ふと窓の外に目を向ければ、日本人で構成するサークルのメンバーが、ジョギングを終えてホテルの駐車場まで体操をしていた。中には若い日本人女性の姿も見られた。インドへの注目度が高まるにつれて、このサークルのメンバーもきっと増えていくだろうと思うながら、インドを後にした。(岐阜信用金庫バンコク駐在員事務所長 高橋英孝)